



箱根駅伝3度出場、司法試験合格

# 練習も勉強も 毎日続ける ことが大切

中央大学法学部在籍時、東京箱根間往復大学駅伝に難所の5区・山登りを  
含む3度の出場経験。その後、中央大学法科大学院を修了し、司法試験に合格  
した梁瀬峰史氏(27)は夢を2つも叶えた超人だ。次なる目標は「人の痛みが分  
かる弁護士になりたい」という。 学生記者 西村卓真(経済学部3年)

## OB探訪

## 第68期司法修習生 梁瀬峰史氏

### 両立の秘けつ

梁瀬さんは箱根以外の駅伝でも活躍した。3年次に全日本大学で区間賞を獲得している。なぜ駅伝と司法試験の両方で結果を残せたのだろうか。誰もが聞きたがる答えはこうだった。「毎日続けることですかね、駅伝練習も勉強も」

多くの経験者によると、長距離走で良い成績を収めるには「距離を踏

む」という言い方をする。弛まぬ練習という意味だ。

長距離走は短距離走と比べ、才能より努力で開花する種目ともいわれている。練習量や精神力が成績に影響する。毎日が自分との闘いだ。

中大駅伝チームは代々自主性を重んじている。チーム練習は週3日。水曜、土曜、日曜のポイント練習と呼ばれるハードな内容。これ以外は自主練習で、週4日はすべての時間

管理を任される。「自分だけですかね、人が見えません」と梁瀬さん。己に克つことの難しさが垣間見える。

練習環境は恵まれていた。中大南平寮周辺には川沿いにジョギングコースがある。中大バスで約10分のキャンパスには立派な陸上競技場がある。「アクセスが抜群ですし、喧騒けんそうから離れていたのもよかったですね」

都会の誘惑に惑わされず、自分のペースで存分に練習できる。自主練習の後は多摩学生研究棟「炎の塔」などで勉強した。

寮生活ではテレビを見ることも少ない。チーム練習、自主練習、授業、勉強と自らつくった時間割で生活した。

もし選手管理に厳しい大学だったら、勉強を一時中断して、競技に専念しなければならなかったのかもしれない。

2010年の卒業後は中大法科大学院に進み、最難関の国家試験とも言われる司法試験に挑戦する日がやってきた。

「一生懸命にやったんですが、手ごたえがなかった」。不合格だった。これを機に「本気になりまして」と少し照れたように話した。2014年9月、2度目の挑戦で見事に合格し



なら弁護士の道が開ける。法学部法律学科入学を決めた。

大学で印象に残るレースが2つある。2年次の箱根と3年次の全日本。箱根ではレース直前に5区出場予定選手にアクシデントが生じ、急ぎよの当日変更で抜てきされた。

山登りが待っている。前半は快調にペースを刻んだが、後半失速し、順位を落とした。自らの「限界を超えた走り」も体験した。結果は区間

た。「今でも合格の実感はないです。あの生活をもう1年送るのは嫌でしたから、これで解放されるかと思うとホッとしました」

## 栄光と挫折

宮城・仙台育英高時代、全国高校駅伝3連覇を成し遂げた。2年次にはアンカーを任せられ、現在も破られていない歴代最高記録を打ち立てた。自身も区間賞を獲得した。

高校卒業とともに、実は陸上競技に終止符を打とうとしていた。厳しい練習、激しいレギュラー争い、強豪校ゆえのプレッシャー。心身ともに満身創痍<sup>そうい</sup>だったのである。箱根駅伝の出場権のない大学で「競争の世界から逃れたかった」と笑った。

熱血漢の中大・田幸寛史監督(当時)が食い下がった。熱心な勧誘が続いた。夢だった法学部進学。中大

14位。「ゴール地点で本来走る1年下の選手が泣きながら謝って来ました。『申し訳ないな…もっと僕が走っていたら…』。今でも忘れられないエピソードだ。

全日本では区間賞を獲得した。全国規模の大会で区間賞を取ったのは高校2年の全国高校駅伝以来。久しぶりの区間賞ということもあり、とてもうれしかったそうだ。



復 大 学 駅 伝

箱根の3度出場は1年生で1区を任された(区間17位)。2年生の5区はメンバー変更があった(同14位)。3年生は4区(同23位)だった。

入学してから3年間、全ての大学三大駅伝(出雲、全日本、箱根)に出場し続けたが、4年生ではけがのため、一つも走ることができなかった。

出雲はチームの若手起用の方針で、全日本と箱根はけがで欠場した。学生最後の箱根は給水係として7区を担当。“力水”を手渡したのは同じ4年の高橋靖主将だ。わずか数百円だったが、苦楽をともにしてきた仲間と最後の箱根路を駆け抜けた。

「僕は箱根を目指して大学に入ったわけじゃなかったんですけど、卒業してから違う世界(法曹界)に飛び込んでも、みんなが(箱根出場を)知っている。すごい大会だと思いま

す。結果を出せなかったのはすごく悔やまれます」

## 人の痛みが分かる

「人の痛みが分かる弁護士になりたい」という。人の痛みが分かるというのは、辛い経験をいくつも乗り越えてきた人。経験は人を成長させる。思いやる、優しい言葉をかける、手助けするというのは誰もができることではない。

高校で3連覇。箱根では区間最下位を経験した。チームメートの激しく揺れる心情も肌で感じた。注目される大舞台で浮沈の経験があるからこそ、人の痛みが分かるという言葉に深みを感じる。

## 新しい世界へ

山形県出身。子どものころ地元で起きた法律問題を機に弁護士を目指



すようになった。父母は教育熱心で、息子の希望を後押ししてくれた。

箱根に出場して、司法試験に合格する。「二兎追う者は一兎も得ず」とことわざにあるように、そんなことができるのかと思う人が多いなか、梁瀬さんは成し遂げた。

現役引退後、試験勉強のため走ら

## OB探訪

### ■カツオのたたき定食

中大時代、練習後の食事はヒルトップ4階の『四季』へ。「カツオのたたきをよく食べていましたね」と梁瀬さん。カツオは脂質が少なく、ビタミンが豊富な低カロリー食材。脳の働きを活性化させるDHA(ドコサヘキサエン酸)を多く含んでいる。梁瀬さんの頑張りの源はカツオにあったのかもしれない。「中大の学食はいいよね、と司法修習生の仲間からも羨ましがられました」。環境のよさは、学食にもあった。

なくなり、体重が10kg近く増えている。今では会う人に「本当に箱根を走ったの?」と半信半疑で見られるそうだ。ひまをみつければ皇居ランと通勤ウォーキングをする。

かつては白地に真っ赤な『C』マークのユニホームがきまっていた梁瀬さん。今はスーツ姿がよく似合う。襟元には司法修習生のバッジが輝いている。

## OB 探訪

～取材を終えて～

# 駅伝マニア

学生記者 西村卓真

第1回大会が1920年(大正9年)に実施されてから90年以上の年月が経ち、今や箱根駅伝は正月には欠かせない国民的イベントになっている。

記者が箱根駅伝を見始めたのは小学生のころだ。クリスマス前後に京都で開催される全国高校駅伝(通称都大路)も見ようになった。大学駅伝の出雲や全日本、実業団のニューイヤーなども観戦。箱根駅伝が中学から陸上部に入るきっかけの一つになった。

東京の大学に行きたかったのも、現地で観戦したいという気持ちが心の片隅にあった。

ナマで箱根駅伝を見たことはないが、東京・立川での箱根駅伝予選会には2年連続で足を運んでいる。

記者が大学に入学する年の箱根駅伝で、中大は5区で途中棄権した。以来シード権から遠ざかる。自分が疫病神かと思ってしまう。

現在では駅伝マニアになっている。専門雑誌を毎月購入し、梁瀬さんが司法試験に合格したという記事を読んだ。大学OBの快挙に

私までうれしくなった。本編で紹介したように梁瀬さんは選手としてもトップクラスだったから、まさに文武両道とは先輩のためにある言葉ではないかと思った。

近年でも今井正人選手や大迫傑選手ら多くの優れた競技者を輩出してきた箱根駅伝。司法試験に合格したという選手が出てくると歴史が大きく変わる。学生ランナーが新たな可能性に挑戦する。梁瀬さんが身をもって教えてくれた。

ある新聞の連載記事に「出会いが人を作る」という見出しで、駒沢大学を“平成の常勝軍団”と呼ばれるまでにした大八木弘明監督が紹介されていた。

中大とは無関係と思う方もいるだろうが、梁瀬さんが高校生の時、スカウトに来たのが大八木氏だ。その大八木氏は、梁瀬さんの弟さんを救助した。弟さんは東京大学を卒業して大学院へ。院生として箱根駅伝予選会に出場するため、合宿地でロード練習中にけがをした。通りすがりの人が見つけ、手当をしたという。その人が大八木監督だ。



梁瀬さんをインタビューする学生記者・西村

同監督は前述の記事に「我逢人」という言葉をひいた。これは道元禅師の言葉で、「人は出会いから始まり、出会いが人を作る」という意味だそう。こんな出会いもあるのかと驚くばかりだ。

話を母校に戻そう。箱根駅伝をあまり知らない人は近年の成績を見る限り、中大は強豪校ではないと思うかもしれないが、前人未踏の6連覇、最多出場、最多優勝と数多くの記録を持つ名門チームである。古豪復活には応援が欠かせない。学生の若い力をランナーに注ぐ。観戦されることを期待する。